研究テーマ	**[　Ⅲ　造形感覚を発揮して，自分らしい表現を生み出すこと]** 平面と立体の造形感覚を発揮し，自分らしい表現ができるような題材の工夫 ―　中学校３年生　篆刻の実践を通して　―

八千代町立八千代第一中学校　教諭　野村　陽子

1　研究テーマについて

「自分らしい表現」というのはどういうことなのか。

作ろうとしたイメージ通りの作品ができたことを思う生徒もいれば，技術や出来栄えを高く望まなくても気に入った作品ができたことを思う生徒がいたり，自分に合った方法で表現できたことを思う生徒がいたりするように，捉え方は様々である。また，友達から「その人らしい」言われることが自分と必ずしも一致しないことがあり，教師側でその生徒に対して自分らしいと感じても，生徒本人は自分らしいと感じないかもしれない。このようなことから，「自分らしい表現」ということには，**本人の満足感が影響するのではないか**と思う。今回，「自分らしい表現」の捉え方として，まずは本人が主体的に感じられる意識であるということを踏まえて，授業に臨みたいと考えた。

さて，造形感覚を養う場合，授業で扱う素材によって生徒の興味や関心が高まり，好奇心が出て学習意欲も高まることも多い。よって素材の選択は重要な鍵になると思う。また，中学３年生の時期は，美的発想力を生かし自分の思いを作品に表現するというような，総合的な力が発揮できるよい時期といってもよい。

しかし，立体的な造形感覚を生かすための題材については，現在の状況では，平面的な題材よりも取り組む時間が少なく限られた時間になってしまい，３年間の美術としての年間計画の中で工夫が必要といえる。そのような中で，平面と立体の両方の造形感覚を発揮して，自分らしい表現を生み出そうとできる題材として，「篆刻」は適した題材ではないかと思う。

以下の３点がそのよさとして挙げられる。

①　自分に関わったり自分を象徴したりする姓名や図案を考え使うものを作ることで，長く愛着のある作品にしようと，関心をもって制作できる題材であること。

②　印面では平面の文字や絵のデザインを，また持つ部分では機能性を考慮した立体のデザインに取り組めるという，平面と立体の両方の造形感覚を発揮することが期待できること。

③　形を彫って削ったり磨いたり印泥を付けて押して写したりする中で，さまざまな用具を使い変化のある作業を体験することで，生徒の興味が持続すること。

（１）研究の仮説

・平面や立体の両面を兼ね備えた篆刻に取り組むにあたって，自由にイメージを広げ自分なりの表現をし，生徒同士が互いのよさを認め合えれば，自分らしい素直で伸び伸びとした作品を制作することができるであろう。

（２）ねらいに迫る手だて

・樹形図を描き，キーワードを「自分」にして連想する言葉をどんどん書かせ，言葉による表現によって，作品制作の手がかりにする。

・自分で気に入った印面の文字や図案，持つ部分の立体のイメージスケッチ量を増やし，多く描ける能力を養う。

・粘土を使用し，持つ部分の試作品を制作して，視覚や触覚を生かした表現ができるようにする。（本時）

・互いのイメージスケッチや作品のよさについて話し合ったり発表したりすることで，自分らしいよさに気付き，制作意欲につなげる。

以上のような手立てから，生徒が自分らしい表現をすることができるようにするための授業展開を工夫した。以下は，苦手とする立体構築能力を育てる授業について考え，構想を自分らしく出来るようにする段階を踏んで授業を工夫した実践例である。

２　実践例

第３学年１組　美術科学習指導案

指導者　野村　陽子

（１）題材名　　篆刻で，自分らしい印を作ろう

（２）目　標

○印面や印の持つ部分を自分なりに考えて作る楽しさを味わうことができる。　（関心・意欲・態度）

○印や持つ部分を平面や立体で考え，機能性を考えてデザインすることができる。（発想や構想の能力）

○石の材質に応じて用具を使い形を工夫して，自分らしい表現で制作することができる。（創造的な技能）

○自分や友達の表現の違いを感じ取り，その人らしい作品のよさを楽しみながら味わうことができる。（鑑賞の能力）

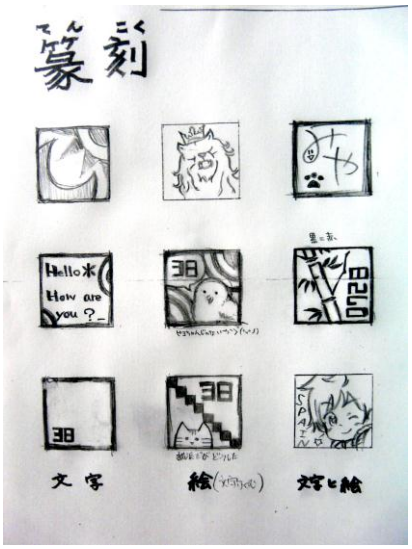
（３）題材について

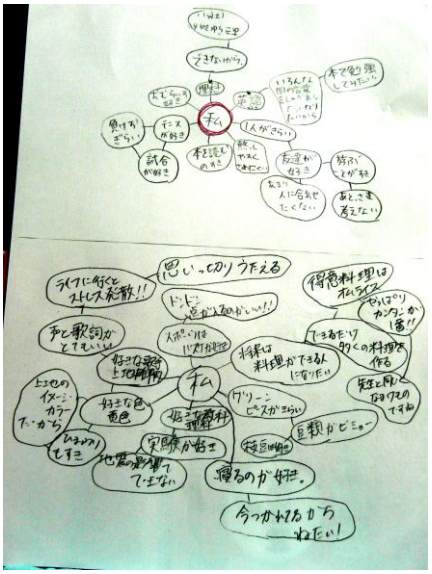
篆刻とは印章を作成する行為をいい，中国を起源としている。落款はサインの意味合いがあり，書と彫刻が融合した工芸美術としての側面が強い。生徒たちにとって，印面を平面で，持つ部分を立体で表現できることは大変魅力的な題材である。自分の姓名を平面でデザインし朱文にするか白文にするか考えることは，材料の性質を考えたり自分の好みや技量を考えたりすることになって，選択の幅が広がるといえる。また，石の性質をつかみ，持つ部分の形を立体的に捉えていろいろな方向から眺めて作品を制作することは，立体構築能力が身に付いてくる。この際に，石を彫る用具を工夫することで，いろいろな形に削っていく楽しさを味わうことができる。さらに制作後は，卒業アルバムの文集で自分のページに載せるため，お互いの作品をいつまでも鑑賞できるようにした。

本校の生徒は，イメージに立体映像がうまく浮かばないため，アイディアスケッチが思うように描けなかった。そのため，あらかじめ側面の４つの面と真上から見た面を考えられるようにワークシートを用意した。しかし，紙上のみのイメージの表現では描こうとしてもまだ不十分であることがわかった。

そこで，授業の過程に，粘土で実物大の試作品を制作することにした。粘土という可塑性に優れた素材を使用することでイメージ通りにいかない場合が生じても何回もやり直すことができるよさを授業に取り入れたいと考えたからである。自分らしい作品が自由に制作できるような時間を設け，立体的に思い浮かべることができる力を付けることによって，生徒がより鮮明にイメージできるようになると考え，本題材を設定した。

≪印面のイメージスケッチ・樹形図≫





（４）　学習計画及び評価計画（１２時間扱い）

次	時	目　　標	学習活動	評価の観点				観点別評価規準（方法）		
				関	発	技	鑑	おおむね満足（B）	十分満足（A）の視点	Cの生徒への手立て
第1次	第1時	○篆刻について理解することができる。	参考写真を鑑賞し,篆刻について理解し,印面と持ち手のデザインのよさを感じ取る。	○			○	篆刻に興味をもつことができる。(カード・観察)	篆刻に興味をもち，感じたことをまとめることができる。(カード・観察)	ワークシートに記入することで，篆刻に取り組みやすくなることに気付かせる。
第2次	第1時	○印面のデザインを構想することができる。	自分らしい表現で印面のデザインを考えることができる。		○	○		自分の気に入った印面のデザインができる。（イメージスケッチ）	自分らしい表現で自分に合った印面のデザインができる。(イメージスケッチ)	朱文・白文のどちらかを選べるように援助する。
	第2～3時	○制作手順を考えて印面を彫ることができる。	制作手順を考えながら,ていねいに安全に彫ることができる。		○	○		制作手順を考えて安全に印面を彫ることができる。(作品)	制作手順を考えながらていねいに安全に彫ることができる。（作品）	制作手順を資料で確認するように援助する。
	第4時	○ていねいに仕上げることができる。	ていねいに彫り，やすりをかけて仕上げる。		○	○		やすりがけをして仕上げることができる。(作品)	美しい作品に仕上げることができる。(作品)	試印してきれいに写る方法を考えさせる。
第3次	第1時	○持つ部分の機能性と美しさについて考え,表現の構想を練ることができる。	持ちやすい形について考え,作りたい形のデザインを考え，構想を練る。	○	○			持つ部分の機能性について考え，自分なりに表現しようとする。(イメージスケッチ)	持つ部分の機能性について考え，表現したい形を自分なりに工夫しようとする。(イメージスケッチ)	持ちやすい形について，一緒に考えながら援助する。
	第2時	**○粘土で立体的に試作することができる。 (本時)**	**自分の表現したい思いを大切にし,立体的に試作する。**		**○**	**○**		**構想をもとに，立体的に試作することができる。 （作品）**	**構想をもとに，自分の思い描くような試作品を立体的に制作し，完成することができる。 （作品）**	**石の前後，横から見た図や上から見た図について，考えさせながら制作させる。**
	第3～5時	○持つ部分を彫ることができる。	石の側面,上部に下がきをして自分なりに彫る。		○	○		道具を使って，丁寧に彫ることができる。（作品）	全体の形を意識しながら，道具を使い分けて彫ることができる。(作品)	力の加減をしながら道具を使えるようにさせる。
	第6時	○全体を見ながら仕上げる。	ていねいに彫り,やすりをかけて仕上げる。		○	○		全体の形を意識してやすりがけをし，仕上げることができる。(作品)	全体の形やバランスのとれた，美しい作品に仕上げることができる。（作品）	全体に見て，持ちやすくなっているかどうか,気付かせる。
第4次	第1時	○実際に押印して,お互いの作品を見る。	押印して,自分らしい作品について鑑賞し,互いの作品のよさを味わう。	○			○	自分の感じたことを伝え合おうとする。（カード・観察）	自分の感じたことを文章でまとめ，発表することができる。（カード・観察）	自分なりにどう感じたのかを聞きながら，カードにまとめさせる。

（５）　本時の学習

①目　標

持ち手の部分を粘土で試作することを通して，立体感を味わいながら機能性を理解し，自分らしい表現を意識することができる。

②準備・資料

ワークシート，粘土，粘土板，粘土べら，新聞紙，水入れ

③展　開

時間	学習活動・内容	活動の支援と評価（〇配慮を要する生徒への手立て）
5	1　学習課題をつかむ。	・粘土で表現するするポイントについて考えられるように，イメージスケッチを振り返らせる。
	印材の持つ部分の形を考え，粘土で立体的に表してみよう	
３５	2　粘土で表現でする。 （1）ポイントを押さえて表現する。	・粘土は可塑性に優れ，削ったり付けたりできるので，自分の形が自由に作れる喜びを味わわせたい。 ・制作中に粘土が乾いた場合，水分を加えながら作業をするとよいことを助言する。
	①機能性について ・持ちやすさ ・重さ ・大きさや形 ・バランス	・持ちやすい形や印面の上下が分かりやすい形があるので，実際の形に触れながら理解できるよう配慮する。 〇イメージがうまくまとめられない生徒には，立体を横から４つの面で見たり，上から見たりして自分なりに表現できるよう，一緒に制作し考えながら援助していく。
	②制作手順について ・粘土の材質を知る ・用具の使い方について ・自分なりの工夫	・粘土の状態では細かい飾りや凹凸が付けやすいが，実際は硬い石を削ることになるので，困難さがないかどうか考えながら制作させたい。 ・工夫して表現できた生徒がいる場合，その良さを他の生徒と共有できるように，全体に声をかけて作品に注目させたい。 〇表現をためらう生徒には，失敗してもすぐに形を作り直せる粘土のよさに気付けるよう助言し，自分なりの表現でいいことを伝えて励ます。 評　イメージスケッチと対比させ，立体感を味わいながら自分らしい表現ができたか。（ワークシート・作品）
5	（2）お互いの作品について鑑賞し合う。	・友達の作品の工夫やよさに気付くことで，伸び伸びと自分らしい表現ができるようになることを理解させたい。
3	3　本時の学習を振り返る。	・自分と友達の工夫の違いやよさに気づき，次回の作品製作に新たな工夫の手がかりが得られるようにしたい。
2	4　次時の学習を確かめる。	・次回は実際に印材の石を彫ることを知らせ，思いを高められるようにする

３　研究のまとめ

生徒にとって，イメージがなかなか浮かばない生徒でも，実際に粘土を扱った方が触りながら頭に浮かびやすい生徒がおり，下がきで表現するのが苦手な生徒も楽しんで活動できていた。４つ側面や真上から見たものを絵で表現することが苦手な生徒でもいろいろな方向から見て実感できる点で，粘土を取り入れることは大変よいといえる。

４　今後の課題

生徒にとっては，４つ側面や真上から見たものを絵で表現することが苦手な生徒がワークシートなどの編面上に表現できるようになるまでは時間がかかるのではないかと思う。粘土を扱う場合，準備や片付けに時間がかかる上，汚れやすいので，感想を記入し話し合ったり発表したりする時間は別に必要になる。そのため，題材にかける時間が多くなってしまうので，年間指導計画を見直し，立体構築能力をつけ造形感覚を養うための見通しが大切である。

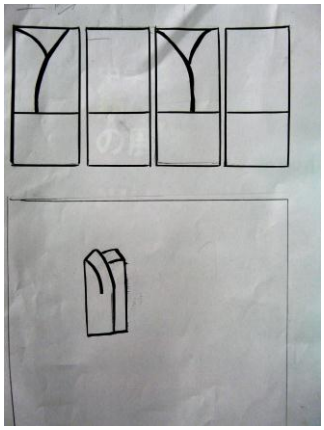
今後の具体的な授業の工夫では，**①粘土クロッキーを実施　②出来上がった作品を前面・側面・背面・上部からスケッチ　③立体作品や立体物の実物や写真を見せて，クイズやワークシートで答えたりして楽しむ時間の設定**　が挙げられる。

この題材を通して，実物の立体をイメージしやすくするために系統的な授業の工夫が求められると思う。

粘土作品　A

粘土作品　A　の
イメージスケッチ

→



粘土作品　B

≪印材(実物)の作品・粘土の試作品≫